テーマ展

韓国の伝統工芸Ⅱ －土が織りなす器の美－

会期：平成17年2月4日(金)～3月21日(月)
会場：佐賀県立名護屋城博物館企画展示室

「韓国の伝統工芸」展は、名護屋城博物館で収集･所蔵している朝鮮半島の伝統的な工芸資料を一堂に紹介する展覧会です。今回はその第２回目として、朝鮮半島で製作された陶磁器や土器を紹介します。

朝鮮半島では、新石器時代に褐色の軟質土器の使用が始まり、三国時代には陶質土器と呼ばれる灰色･硬質の土器も登場します。高麗時代には、中国からの技術をもとに青磁の生産が始まり、やがて中国のそれをも凌ぐ優品が産み出され、「高麗青磁」として名を馳せました。また、朝鮮時代には、高麗青磁の技術を受け継いだ「粉青沙器」や、中国の影響を受けた「白磁」がさかんに作られました。それぞれの時代に高い技術によって作られたこれらの陶磁器は、現在でも高く評価され、世界各地で珍重されています。

今回の展覧会では、当館所蔵品を中心とした陶磁器･土器を種類ごとに展示･紹介しています。また、現代の作品として、当館で収集した韓国南部地域の無形文化財技能保有者等により製作された甕器も展示しています。さらに、朝鮮陶磁の影響を大きく受けて発展した唐津焼などについても、参考資料として紹介しています。

どうぞごゆっくり御観覧いただき、朝鮮半島で製作された様々な焼き物の美しさやその魅力にふれていただければと思います。

Ⅰ．土　器

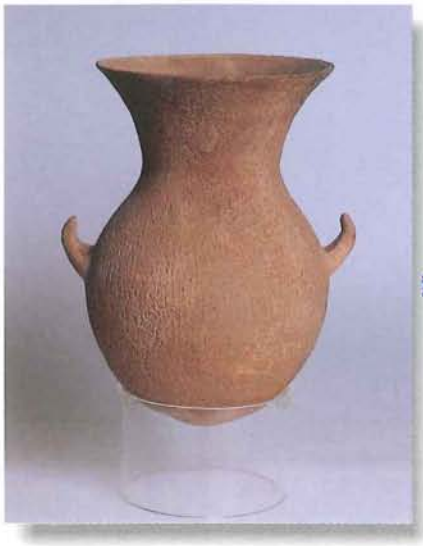
朝鮮半島での土器の生産は、約８千年前の新石器時代初期に始まった。深鉢を中心とする器の表面に施文具で沈線の幾何学文様を施した櫛目文土器は、この時代に朝鮮半島全域で作られ、初期の隆起文土器と並んで朝鮮半島新石器時代を代表する土器である。

紀元前10世紀頃からの青銅器時代には、櫛目文土器より薄く器面への施文のない無文土器が産み出され、縄文時代晩期から弥生時代の日本の土器にも強い影響を与えている。また、原三国時代(紀元前後～３世紀頃)には、従来の褐色･軟質の無文土器に加え、さらに硬質の瓦質土器が使われるようになった。

三国時代(４世紀～７世紀)になると、軟質土器に加えて、還元炎焼成によってさらに高温で焼き締められた陶質土器が登場し、北部の高句麗、南東部の新羅、西部の百済、南部の加耶諸国それぞれに独特の土器文化が形成され、形象土器など芸術性の強い土器も産み出された。

その後の統一新羅時代には、印花文土器に代表される陶質土器が作られるとともに、緑釉などの鉛釉陶器も見られるようになる。

櫛目文土器[複製]
新石器時代中期(約4500年前)
岩寺洞遺跡(ソウル特別市)出土
韓国国立中央博物館原蔵



無文土器牛角把手付壺
原三国時代(BC2世紀)

鳥形土器
原三国～三国時代
(３～４世紀、加耶)

陶質土器車輪飾土器(模造)
三国時代(5世紀、加耶)
慶尚南道宜寧出土
韓国国立晋州博物館原蔵

陶質土器角杯形土器(模造)
三国時代(加耶)
慶尚道出土

陶質土器把手付土器
三国時代(5世紀後半～6世紀初、新羅)

陶質土器騎馬人物像土器(模造)
三国時代(5世紀後半、新羅)
金鈴塚(慶州市)出土
韓国国立中央博物館原蔵

陶質土器台付長頸壺
三国時代(5世紀後半～
6世紀初、新羅)

陶質土器舟形土器(模造)
三国時代(5世紀後半、新羅)
金鈴塚(慶州市)出土
韓国国立中央博物館原蔵

陶質土器陰刻点文碗　統一新羅時代(7～10世紀)
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵　溝上元良・正子夫妻贈

II. 青　磁

朝鮮半島の磁器は、統一新羅時代の陶質土器の製作技術を土台として、中国の越州窯から伝わった技術によって、9～10世紀初め頃に生産が始まったとされる。青磁・白磁・黒釉磁などが焼かれたが、特に青磁は非常に高い技術が産み出され、「高麗青磁」として国内外で珍重された。窯は朝鮮半島の西南海岸を中心に分布しており、中でも全羅南道康津郡一帯と全羅北道扶安郡柳川里は高麗磁器の二大生産地であった。

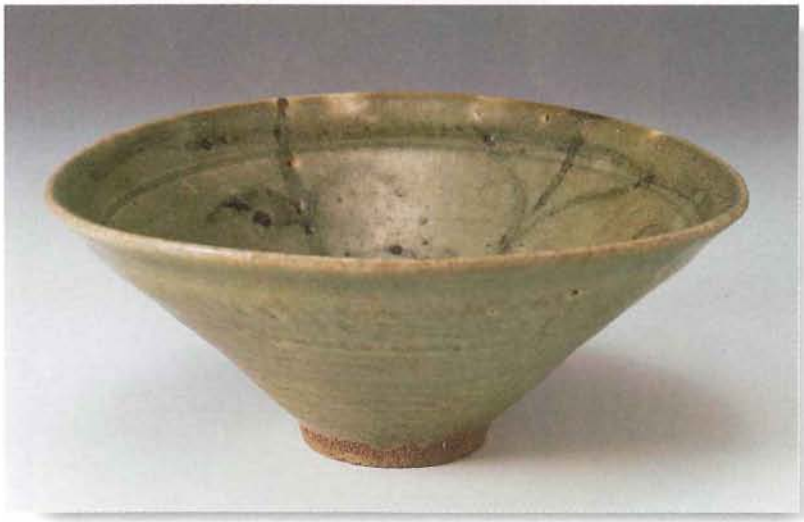
高麗青磁の特徴の１つが、翡翠に例えられる独特の美しい色である。これは、釉薬や胎土に含まれる微量な酸化第二鉄が、還元炎焼成によって酸化第一鉄に変化することで現れる色で、高麗を訪れた中国人たちも高く評価したという。また、焼成後の釉薬表面に見られる貫入の美しさも、その特徴といえる。

高麗青磁の施文技法は、「陽刻」・「陰刻」・「透彫」・「象嵌」・「印花文」・「鉄絵」・「白堆」・「辰砂」・「金彩」などさまざまである。中でも、器面に文様を彫り込んで白土・黒土を埋め込み、乾燥後に表面を削って文様を浮き立たせる「象嵌」技法は、高麗青磁を代表する独特の技法である。また、表現される図柄・文様としては、荔枝文・菊花文・牡丹文といった植物をモチーフとしたものや雲鶴文など、吉祥を表すものが多い。

青磁の技術は、象嵌技法が生み出された12世紀頃にそのピークを迎えるが、13世紀に入ると、モンゴルの侵攻による混乱によって生産技術は低下し、煩雑な象嵌技法から離れ、「印花」(スタンプ)によって文様を表現する技法も見られるようになる。やがて、高麗時代末期の14世紀には、倭寇による朝鮮半島南部の荒廃によって、唯一の生産拠点となっていた康津地域の沙器匠(陶工)たちが内陸に避難すると、その衰退した技術は、青磁に代わって生産が始まった「粉青沙器」へと受け継がれていくこととなる。

青磁象嵌荔枝文鉢　高麗時代中期(12世紀頃)

青磁象嵌菊花文馬上坏
高麗時代中期(12世紀頃)



青磁鉄絵草花文碗　高麗時代中期(12～13世紀)
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵　溝上元良・正子夫妻贈

青磁陽刻牡丹文鉢
高麗時代中期(12世紀頃)

Ⅲ. 粉青沙器

粉青沙器とは、「粉粧灰青沙器」(白土を粉粧した灰青色の沙器)という意味で、成形した器に白土を施した上で文様・図柄を表現し、施釉したものである。高麗時代末期の象嵌青磁の技術を母胎に生産が始まったため、その初期段階では高麗青磁との区別が曖昧である。粉青沙器の生産地は全国に広がるが、中でも全羅道・慶尚道・忠清道に集中しており、無等山忠孝洞窯(光州広域市)や鶏龍山窯(忠清南道公州市)などが著名である。

粉青沙器の施文技法は、高麗青磁の技術を色濃く残した「象嵌」及び「印花文」がその初期から見られ、特に印花文は宮廷用の大部分を占めた。宮廷用のものの多くには、「長興庫」(宮中で使用する物品の調達・管理を行う官庁)などの銘が入れられた。また、器面の白土を削り落として図柄を表現する「彫花」や「掻き落し」、厚く施した白土の上に鉄砂顔料で図柄を描く「鉄絵」も多く見られる。鉄絵は粉青沙器の最末期に流行し、鶏龍山山麓で焼かれた。他には「粉引」、「刷毛文」などもある。

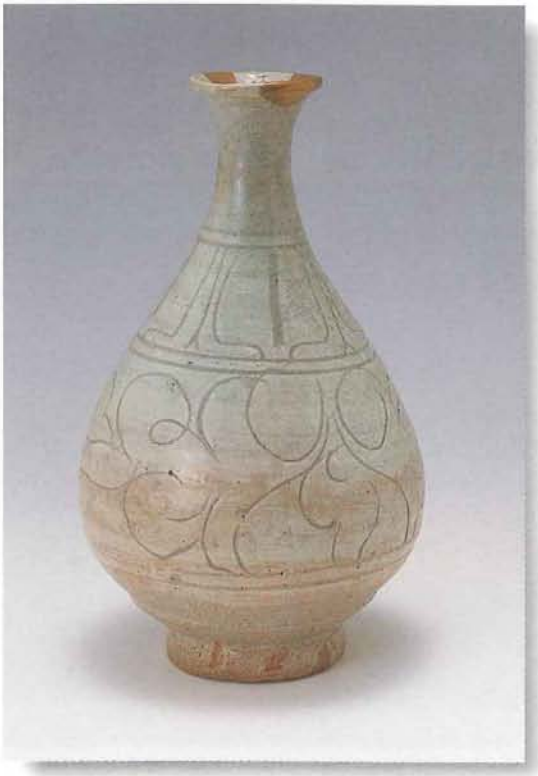
貴重品である高麗青磁の使用は主に宮廷や貴族階級に限られたのに対し、大量に作られた粉青沙器は、宮廷・貴族だけでなく一般庶民の間にも普及した。15世紀中頃にはその最盛期を迎えるが、宮中で次第に白磁を好んで使用するようになると、その生産は急速に衰退して質の低下も進み、16世紀中頃にはほぼ消滅してしまうこととなった。

粉青沙器印花文鉢(ふんせいさきいんかもんはち)　朝鮮時代(15世紀)

粉青沙器印花文鉢(ふんせいさきいんかもんはち)　朝鮮時代(15～16世紀)

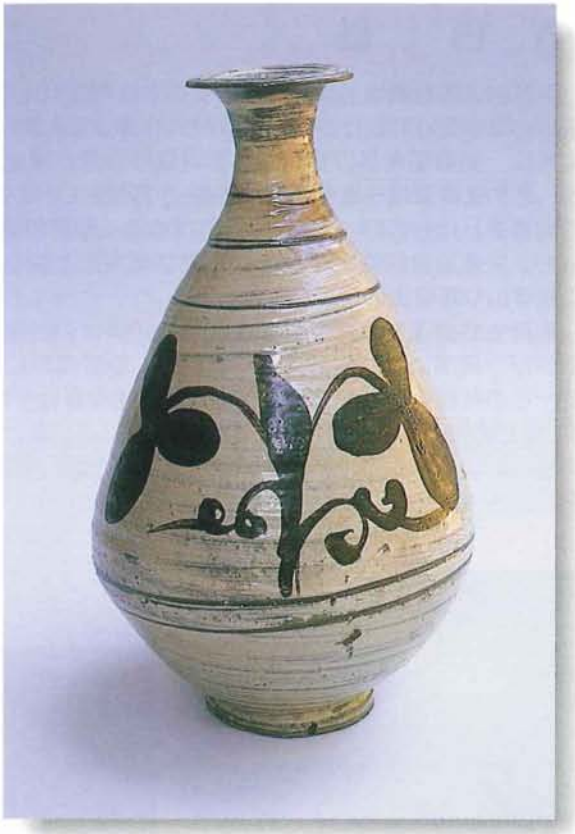
粉青沙器印花「宜寧(ウリョン)」「長興庫(チャンフンゴ)」銘皿(めいさら)

朝鮮時代(15世紀)

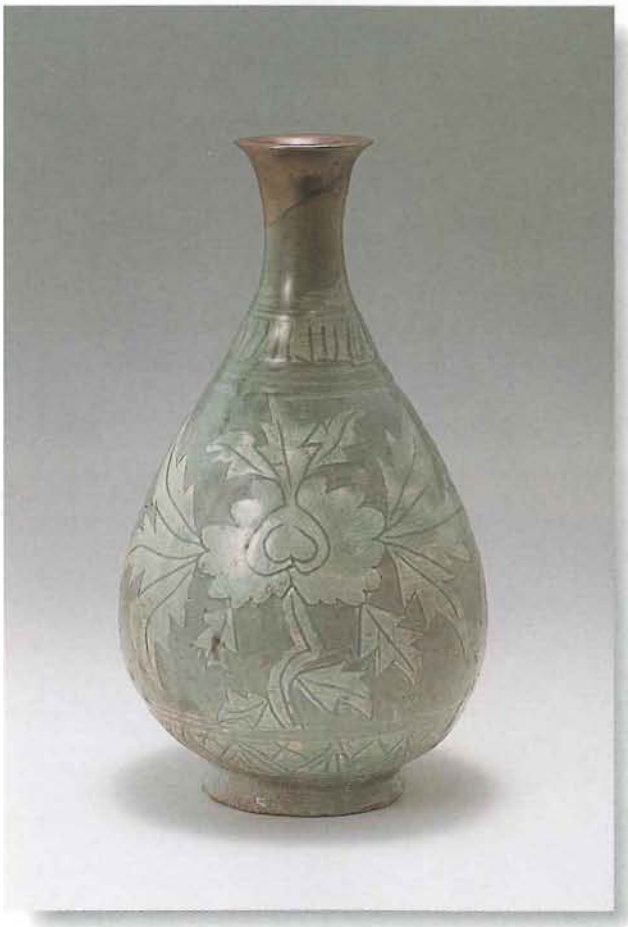


粉青沙器彫花草花文瓶(ふんせいさきちょうかそうかもんへい)　朝鮮時代(15～16世紀)

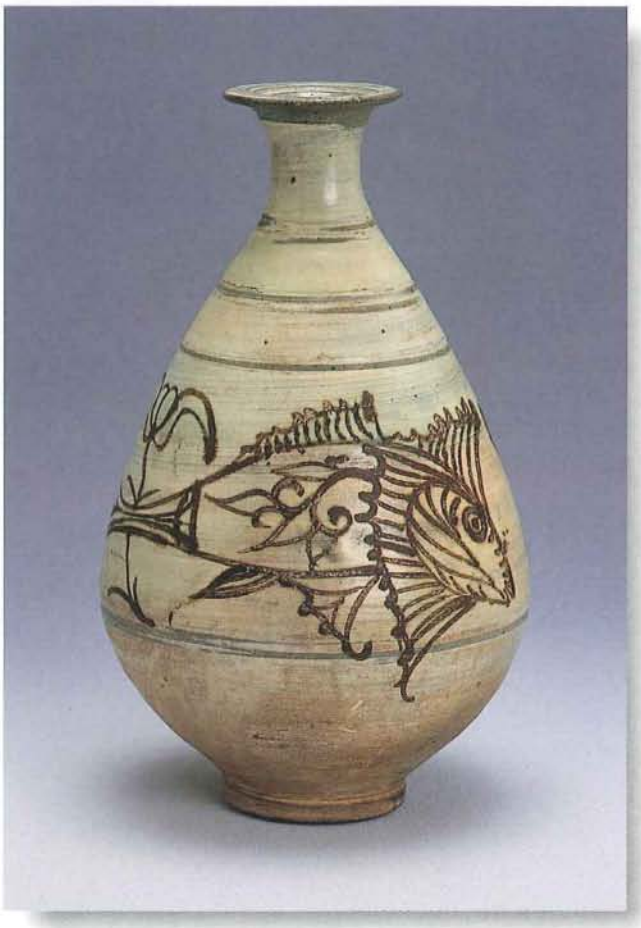
ふんせいさきてつえにんじんはもんたわらつぼ
粉青沙器鉄絵人参葉文俵壺
朝鮮時代(15世紀末～16世紀前半)



ふんせいさきてつえそうかもんへい
粉青沙器鉄絵草花文瓶 朝鮮時代(15～16世紀)



ふんせいさきかきおとしぼたんもんへい
粉青沙器掻落牡丹文瓶 朝鮮時代(15～16世紀)



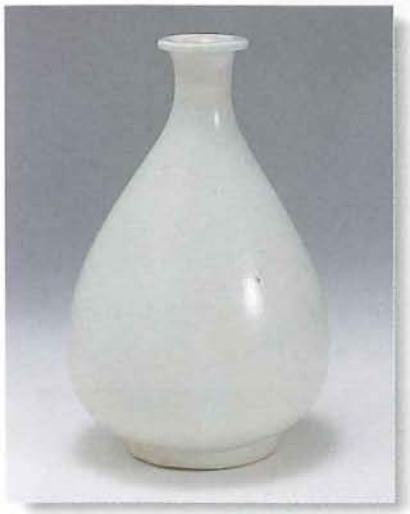
ふんせいさきてつえぎょもんへい
粉青沙器鉄絵魚文瓶 朝鮮時代(15～16世紀)

Ⅳ. 白　磁

朝鮮時代の白磁は、高麗時代のものとは異なり、中国(明)の景徳鎮の白磁の影響を受けて製作され、朝鮮時代を通じて生産・愛用された。15世紀後半に、朝鮮国直営の官窯である司饗院分院が京畿道広州に設置されると、その生産量は一層増大し、壬辰・丁酉倭乱(文禄・慶長の役)の混乱で一時期衰退したものの、王室・貴族だけでなく庶民の間にもその使用は広まった。生産は全国に広がったが、主な地方窯としては、粉青沙器と同様に無等山や鶏龍山の窯が知られる。

実用性や端正な様式が重視されたこの時代の白磁には、無文のものが多いが、呉須により図柄を描く「青華」、鉄砂顔料による「鉄絵」、高麗青磁からの技術を受け継ぐ「象嵌」のほか、生産量は少ないが「辰砂」や「印花文」などの施文技法も見られる。青華白磁などに描かれる図柄は、当初は中国の影響を強く受けた唐草文などであったが、次第に松・竹・鳥・鹿等を配した長生文など朝鮮独特のものが中心となった。

白磁象嵌花文碗（はくじぞうがんかもんわん）　朝鮮時代(15世紀)
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
溝上元良・正子夫妻贈



白磁瓶（はくじびん）　朝鮮時代(15～16世紀)

白磁鉄絵蘭文壺（はくじてつえらんもんつぼ）
朝鮮時代(17～18世紀)

白磁鉄絵草花文壺（はくじてつえそうかもんつぼ）
朝鮮時代(17～18世紀)

Ⅴ. 出土遺物に見る朝鮮陶磁

朝鮮半島では、南部地域を中心に青磁・白磁・粉青沙器などの窯跡が分布している。また、文禄・慶長の役の拠点となった名護屋城跡や周辺陣跡からは、朝鮮半島産の陶磁器の出土が見られることから、輸入され、大名たちの間で好んで使用されていたことが分かる。

ここでは、朝鮮半島南部の統一新羅時代から朝鮮時代にかけての遺跡(窯跡)から採集された陶磁片と、名護屋城跡及び陣跡の発掘調査によって出土した朝鮮陶磁を紹介する。

朝鮮半島から出土した陶磁器片
高麗～朝鮮時代　西谷正先生贈

名護屋城跡から出土した陶磁器片　桃山～江戸時代

Ⅵ. 現代の生活陶器

朝鮮半島の陶磁史においては、華やかな青磁や白磁・粉青沙器などが注目されがちであるが、食器や食物貯蔵容器として古くから朝鮮半島の人々が最も身近に使用していたのは、素焼きもしくは灰釉などで簡単に施釉された程度の陶器(甕器)であった。

現在の韓国でも、味噌・醤油などの醸成・保管には甕器が使われており、人々の生活に密着したものとなっている。また、現在は冷蔵庫の普及で急速に減ってきているが、かつて秋の野菜収穫の時期に行われていたキムチ作り(キムジャン)の際にも甕器は欠かせないものであった。さらに、陶磁器製の食器は、金属・プラスチック製品の普及によって一時少なくなったが、現在は再び見直され、家庭でも一般的に使われるようになっている。

ここでは、韓国南部の慶尚南道・全羅南道・済州道で、叩き技法など古くからの技術を継承し、現在でも製作が続けられている伝統的な甕器を紹介する。

高山里(コサンリ)の甕器(オンギ)
制作者：趙喜満(ジョヒマン)
(蔚山広域市在住)

甕

甕器(オンギ)の製作道具

甕器匠(オンギジャン)(韓国重要無形文化財第96号)の作品
技能保有者候補：李学洙(イハクス)
(全羅南道在住)

薬味入れ

甕

焼酎製造器

ホボク匠(チャン)(済州道無形文化財第14号)の作品
※ホボク＝済州道独特の甕器の一種。
技能保有者：申昌鉉(シンチャンヒョン)(済州道在住)

壺

甕

水の運搬用容器

[参考]唐津焼と朝鮮陶磁

日本各地の焼き物の多くは、朝鮮半島との関わりがある。その最大の契機は、16世紀末の豊臣秀吉による朝鮮侵略(文禄・慶長の役/壬辰・丁酉倭乱)である。出兵した大名たちが連れ帰った多くの陶工たちの技術が日本の多くの焼き物に多大な影響を及ぼし、それによって各地の作陶技術は大きく発展した。佐賀県内の唐津焼や有田焼もその1つである。唐津焼には、「鉄絵」や「象嵌」・「印花文」など、朝鮮時代前半期の作陶技術の強い影響を受けたものを多く見ることができる。

鉄絵芦文片口(松浦系)
桃山～江戸時代初期

象嵌耳付水指(武雄系)
江戸時代(17世紀)

象嵌草花文大鉢(武雄系)
江戸時代(17世紀)

＜出品資料一覧＞

	資料名	点数	器高(cm)		資料名	点数	器高(cm)
1	櫛目文土器(複製)	1	38.5	20	粉青沙器鉄絵草花文瓶	1	28.5
2	牛角把手付壺	1	23.2	21	粉青沙器彫花草花文瓶	1	27.0
3	鳥形土器	2	大 28.8	22	粉青沙器掻落牡丹文瓶	1	31.5
4	陶質土器車輪飾土器(模造)	1	22.7	23	粉青沙器鉄絵人参葉文俵壺	1	20.0
5	陶質土器角杯形土器(模造)	1	24.6	24	白磁象嵌花文碗 ※	1	8.6
6	陶質土器台付長頸壺	1	37.0	25	白磁鉄絵蘭文壺	1	14.8
7	陶質土器台付長頸壺	2	大 24.8	26	白磁鉄絵草花文壺	1	15.3
8	陶質土器把手付土器	1	10.0	27	白磁瓶	1	22.7
9	陶質土器舟形土器(模造)	1	15.0	28	高山里の甕器	2	大 57.9
10	陶質土器騎馬人物像土器(模造)	1	23.5	29	甕器の製作道具	8	最大長 44.5
11	陶質土器陰刻点文碗 ※	1	5.5	30	甕器匠の作品	9	甕最大 51.8
12	青磁鉄絵草花文碗 ※	1	6.5	31	ホボク匠の作品	7	甕最大 44.0
13	青磁陽刻牡丹文鉢	1	6.0	32	鉄絵芦文片口	1	11.1
14	青磁象嵌荔枝文鉢	1	6.0	33	鉄絵草文壺	1	10.5
15	青磁象嵌菊花文馬上坏	1	10.5	34	象嵌草花文大鉢	1	14.0
16	粉青沙器印花「宜寧」「長興庫」銘入銘皿	1	2.2	35	象嵌耳付水指	1	18.8
17	粉青沙器印花文鉢	1	5.3	36	朝鮮半島出土陶磁器片	9	–
18	粉青沙器印花文鉢	1	7.5	37	名護屋城跡出土陶磁器片	6	–
19	粉青沙器鉄絵魚文瓶	1	27.4	38	立野并苗代川焼物由来記	1	書冊 縦25.2

※は佐賀県立九州陶磁文化館所蔵、他は名護屋城博物館所蔵

【附記】

(1)本展覧会を開催するにあたり、佐賀県立九州陶磁文化館より資料出品等の御協力をいただきました。記して深謝申し上げます。

(2)本展覧会は、本館学芸員安永浩・国際交流員安熙敬が担当しました。本パンフレットの執筆・編集は安永が担当しました。

佐賀県立 名護屋城博物館
Saga Prefectural Nagoya Castle Museum
〒847-0401 佐賀県唐津市鎮西町名護屋1931-3
TEL. 0955-82-4905 FAX. 0955-82-5664
〔E-mail〕nagoyajouhakubutsukan@pref.saga.lg.jp
〔URL〕http://www.pref.saga.lg.jp/atcontents/kanko_bunka/k_shisetsu/nagoya/nagoyaindex.htm

開館時間 9:00～17:00(入館は16:30まで)
休館日 月曜日(休日の場合はその翌日)
観覧料 無料(特別企画展開催期間中を除く)

編集・発行 佐賀県立名護屋城博物館
© 2005 佐賀県立名護屋城博物館

平成17年2月4日発行
佐賀県立名護屋城博物館

環境保護のため再生紙を使用しています。